
Re-die ~生と死を担う青~

瀬見尾津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re·die～生と死を担う者～

【Zコード】

Z2138S

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

特別なクエストが起こった場合にのみ発生する、ゲーム世界への移動。そこでは自分自身の身体がプレイキャラクターとなり、動かなければならない。元の世界へ戻る方法は、クエストを達成すること。伝説のプレイヤーにいなの案内を受けて、初心者の桐生とシオは「Re·die」という名のクエストへ挑む。

1・スタートチュートリアル

くだらないと思いながらウィンドウを閉じた。

別のボタンをクリックして、別のゲームを始める。数分後、チュートリアルが終わると再び「クソゲーだ」と、呟いて、ウィンドウを閉じる。

「……つまんねえ」

同じことを何回も繰り返しては、娯楽を求めてインターネットの世界をさまよう。

力チカチとクリックし、時折キー ボードを叩く。
機械的な音だった。

「……ふうん」

独り言。

新しいウインドウが開かれて、ゲーム画面が現われた。
スタートボタンをクリックし、おなじみのチュートリアルに突入する。

力チ、力チ、力チ……ただの暇つぶし、くだらない時間稼ぎ。あとで頭が痛くなると分かっていても、彼は、画面から離れることをしなかつた。

* * *

桐生：はじめまして^ ^

にいな：よろですー

桐生：初心者なんで、全然分からんんだけど・・・

シオ：あ、うちもそうですよー

にいな・つか、このゲームやつてるひとじょとこどものつ
てるwww

桐生・そーなんですかw

にいな・わからなことあつたらおしえたげるよ

桐生・ありがとうござります^_^

* * *

彼はよく考える。

繰り返される変わり映えのない毎日が、突然非日常に変わること
を。そして、その非日常の中で毎日、刺激的な暮らしをすることを。
ありえないからこそ、彼はそんな夢を見ていた。
その夢を擬似的にでも体験したくて、ゲームを漁つた。

* * *

シオ・チュートリアル終わりました?

桐生・終わりましたよ

にいな・じゃあ、さつやく町の外に出ないと

桐生・出ました

シオ・あ、じゃあ先の方で待ってますね

にいな：初心者一人でだいじょうぶ？www

桐生：モンスターはざいばっかでしょ？

桐生：あ、シオs見つけました

シオ：わーい、じゃあ友録しましょう

桐生：はい^ ^

にいな：クラスはなに？

桐生：シーフです

シオ：プリーストw

にいな：ああ、それだと確實に死ぬねwwwww

桐生：え？ www

* * *

「だって、最初のボスがラスボスだから」

にやにやと笑いながら、彼女は打ち込んだ文字を送信する。
数秒の後に返つてくる初心者たちの返信に、彼女は笑い声を上げた。

「ちゃんとチユートリアル読んだの？ これはそーいうゲームなのよ」

再び指を動かして、彼女は文字を打ち込み始める。

* * *

桐生：にいな、助けてくださいよ

にいな：無理wwwあたし今、遠いところにいるからwww

シオ：せめてファイターかナイトがいれば良いんですけど

桐生：レベルどんなにあげても？

にいな：無理だねwww

* * *

画面を見つめて呆然とする。

彼は「マジでくそだ」と、呟いて、やめる意志を固めた。始まってすぐに死ぬゲームなんてつまらない。

先ほどからやけにサーバーが軽いと思つたら、プレイしている人が少ないからなのだ。何人かのプレイヤーの姿はあるが、どれも低レベルじゃないか。

すぐにキーボードを叩き始めた彼だが、投稿する寸前に目を疑つた。

* * *

Redie：今から首つって、死ぬ

にいな：またあんたかw

シオ：知り合い？

にいな…つてゆーか、亡靈? www

にいな…あ、準備しといでねこれからじばりへ落ちれないから
www

シオ…え??

* * *

画面がブツツと真っ黒になった。

停電かと思つて室内を見渡すが、電気は相変わらず点いていた。
彼女はほっと息をつくと、パソコンの電源を入れようと手を伸ばした。

その直後、画面に現われたのは燃えるような灼熱の大地 砂漠
だつた。

砂漠に立っているのは自分のプレイキャラクターと、先ほど友達になつたばかりのキャラクター。

「……え、どういうこと?」

学校の友人に誘われて始めたゲームは、それまでのゲームとは何かが違つていた。

* * *

桐生…どうしたらいいんでしょう?

シオ…まあ?

シオ…とりあえず、歩いてみましょつか?

桐生：はい

桐生：砂漠ですね

シオ：歩くほどに、HPが削られていくみたい

桐生：メニューアイコン消えてるし

桐生：落ちれなって、まさか・・・？

シオ：どうやら、そうみたいです

桐生：すげークソゲージゃんｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

こいな：何言つてるの、これからがお楽しみでしょ

シオ：こいなおかえりなさい

こいな：足元探索してみ？ ワープできるから

桐生：ワープって、どうい?

こいな：この世界にｗｗｗｗｗ

* * *

画面の中で、彼は魔方陣を見つけた。
そこへ乗ると、画面が真っ白になつた。否、視界が真っ白に染ま
つた。

「！？」

意識が薄れていいく。

何なんだ、このゲーム。

2・クエスト開始

「桐生さん、ですよね？」

「……え、あ、ああ」

目を覚ますと、高校生くらいの少女の姿が見えた。
彼は起き上がりて周囲を確認する。

「……あれ、ここって」

「砂漠、です」

彼は少女の顔を見た。

「えっと、君は？」

「シオです。本名は、滝崎詩織」

嘘だろ、信じられない。

「お、オレは……桐生星一」

名乗り返す彼だが、動搖していた。

シオと名乗る少女は春らしい格好をしており、あの世界からこの世界へと、そのままの姿で来てしまったことが分かる。

桐生もまた、Tシャツにジーンズというカワツな格好をしていた。
「何か、変ですよね。さつきまでやっていたゲームの中に入っちゃうなんて」

「……やつぱりそつなのか」

桐生は頃垂れた。こんなことになるなら、やつぱりやめていれば良かった。

「でもやつぱり、ゲームなんでしょうね。砂漠なのに、熱くないですかし」

シオの言葉にはつとした。言われてみれば、熱くない。風が吹いているらしいことは体感で分かるが、照りつける太陽の熱さがまったく伝わってこないので。

「困ったな」

「困りましたね」

二人は途方に暮れた。

初心者である二人には、今の状況を理解し受け入れるのが精一杯で、起こすべき行動が思いつかない。

さくつと踏みしめる砂の大地、桐生は息をつくと、その辺を適当に歩き回った。先ほどのようにワープできるかもしれない。

「あの、桐生さん？」

ぞくぞくと歩き回って、怪しいところは念入りに探る。

「無駄だと思います、桐生さん」

「は？」

ムカツと来て、桐生はシオを振り返った。

シオはびくつとしながらも、彼へ言う。

「うちもさつき、探しましたから。何も、見つかりませんでした」

「……クソッ」

「何てことだ。

「せめて、にいなさんに会えたら良いんですが……」

と、俯くシオ。

桐生は少し思考すると、彼女へ背を向けた。

「とりあえず歩こう。街が見えるかもしね」

「あら、あんたがこの時間にいるなんて珍しいじゃない」
にいなはミネラルウォーターの瓶を片手に、青年の向かいへ腰を下ろした。

「バイト、やめたからな」

「じゃあ二ート？ また？」

と、おかしそうに笑い出す彼女。高校生のようにも、大人のようにも見える外見は相変わらず世間離れしていた。

青年は呆れたようにして、言った。

「で、今回の参加人数は？」

「とりあえず十三人ね。その内の一人は初心者よ」
にいなは瓶に口を付けた。

「じゃあ、ここまで来られるかが問題だな」

「そうね」

青年の杞憂にも構わず、にいなはミネラルウォーターを飲む。

「……えーと」

「も、モンスターですね」

「かわいいけどな」

と、かがみ込む桐生。

二人の前に立ちはだかるのはネズミ型の小さなモンスターだった。あまり強そうには見えないが、その口には鋭い牙が生えている。

「危ないですよ、桐生さん！」

シオが止めるのを無視して、彼はモンスターに手を伸ばした。

「ほりほら、かかるてこいや」

モンスターはしばらく彼の様子をうかがっていたが、やがて口を大きく開けてかみつこうとした。

「おっと」

間一髪かわして、左足でモンスターの脇腹を蹴る桐生。モンスターは鳴き声を上げて遠くへ飛ばされていった。

「やっぱ雑魚だつたな」

「き、桐生さんって、勇気あるんですね」

と、胸をなで下ろして苦笑いをするシオ。

桐生は何の言葉も返さずに、再び歩き始めた。

続々と集まつてくるプレイヤーたち。

老若男女、さまざまだ。

「にいなさん」

人懐っこい笑みを浮かべて近づいてきたのは、小学生くらいの少女

だった。

「遅かったのね、うーたん」

「そなんですか。うー、今日はちょっと道間違っちゃって

「

えへへ、と笑う少女うー。

「つてことは、あとは初心者の一人だけか」と、青年が呟く。

「あれれー、初心者さんが一人もいるんですかあ？」
うーが首を傾げると、にいながにやつと笑った。

「そうなのよ。まあ、待つだけ無駄でしょうけどね

歩き始めて何分が過ぎただろう。

「シオ、今何時だか分かる？」

桐生の問いに、シオは首を振った。

「ごめんなさい、分かりません」

その左手首には腕時計がはめられていたが、針は止まっていた。
桐生は舌打ちをすると、また前を向いて歩き続ける。

その後をはぐれないよう、必死で付いていくシオ。
ゲームの中だけあって、太陽は未だに沈まない。

吹いてくる風は温く、どこか機械的で気持ち悪さを覚えた。
足元は相変わらず砂、砂、砂。草の一本も生えていない、ただの
人工砂漠だ。

「どうしたら、帰れるんでしょう？」

ふと呟いたシオに、桐生が問い合わせを投げかける。

「何お前、帰りたいの？」

「え……か、帰りたく、ないんですか？」

「ないね」

言い切る桐生に、シオは困惑した。確かに異世界への憧れはあつたが、出口の見えない世界は嫌だ。

「うちは、いつもの日常が、すごく懐かしいです」

「オレにはそんなのない。あるのは、変わらない毎日だ」

歩き続ける彼の背中が、ふと寂しく思えた。

シオは彼の隣へ立つと、横顔へ声をかけた。

「聞いても良いですか？」

「何を？」

「桐生さんは、いったいどんな人なのか」

彼がちらつと彼女を見て、困惑するように空を仰いだ。

「年は十六、職業は引きこもりだよ。中一の時から部屋に引きこもつて、毎日パソコンしてた」

「じゃあ、うちの方が一つ年上ですね。うちは女子校に通つてました」

「……ふうん」

改めて互いを見合い、ほぼ同時に視線を逸らす。

「女子校って、本当にいるの？ その……レズビアンとか」

桐生がそう尋ねると、シオは苦笑いを浮かべた。

「どうでしょ、うちの周りにはいませんでしたし……噂くらいならありますけど、真実かどうかは分かりません」

「そりが……」

と、桐生は口を閉ざした。十六歳にしては大人びている彼だったが、中身は年相応の少年のようだ。

シオはにこっと微笑んで、同じように口を閉じて歩いた。

「というわけで、今回は十一人でやるわけだけど……バランス悪いわね」

「クレリックがお前だけっていうのが不安だな」

「あんたは黙つてて、青龍」

と、にいなが冷たく言い放つ。

青龍と呼ばれた青年は口を閉じると、カウンターへ向かつて行った。

九人に囲まれて、にいなが再び大きな声を上げる。

「みんな分かつてるとと思うけど、目的はRe-dieの救出よ。このクエストが一番面倒なんだけど、要領は分かつてる？」

「あ、自分は今回が初めてなんで、ちょっと足手まといになるかも」と、口を開いた少年ににいなは問う。

「クラスは？」

「ナイト、レベルは一応22あるよ」

面子を確認して、にいなは彼へ言った。

「じゃあ、うーたんに支援してもらつて前線行きなさい。ただし、一番奥に行けるのはシーフかアサシンだけだから注意してね」

「了解。つーさん、よろ」

「よろしくねえ、ソレイユさん」

にいにこと挨拶を交わす少年と少女。

その他のメンバーは、にいなの顔見知りだった。そのため、言わずとも要領は分かっているはずだ。

「じゃあ、そういうわけで準備が出来たら行くわよ」と、にいなは奥に位置する扉を指さした。

「う、うそ……マジで？」

「マジだな、宿屋だ」

前方に見えてきた建物に、桐生とシオは目を疑った。何度瞬きをしても、目をこすつても、それはそこに在った。

「行くぞ、シオ！」

「え、ちょっと待つて！」

走り出した桐生を追つて、シオも全速で走り出す。

3・パーティを組む

ばたんと開かれた入り口の扉、現われた姿にいなは驚いた。

「嘘、本当にたどり着くなんて」

桐生は状況を把握していないのか、入ってくるなりその場に座り込んだ。

「あー、疲れた……つか、何だこいつ？」

「宿屋ですよう」

と、彼へ歩み寄る。「

「宿屋って……」

一同の注目を集めて、桐生は居心地が悪くなつてきた。すると、シオがよつやく中へ入つてくる。

「やつと着いた……えつと、あれ、みんなこじんなといふで」と、シオははつとする。

「もしかして、こじが出口なんですかー？」

「違うわ、入り口よ

と、即答するこじな。困惑するシオと桐生に近づいて、彼らへ尋ねた。

「桐生とシオで間違いないわね？」

「お、おう

「そうです、うちがシオです」

ざわめぐ一同を目で制し、こじなは状況を説明する。

「あたしがこじなよ、覚えてるでしょう？ それで、これからあたしたちは *re - dge* の救出へ行くといひなの。それをクリアできればこじから脱出できるわ。でも、初心者のあんたたちは付いてくるだけにしなわこ。足手まといになるから」

「…………」

「さつき言つた通りよ。死んでも脱出は出来ぬせど、どうせなら僕持ちよく出て行きたいでしよう？」

「持ちよく出て行きたいでしよう？」

と、冷めた目を向けるにいな。

桐生はシオと目を合わせた。

「脱出」って……

「う、うちほ行きます！ だつて、ここから出たいもん！」

にいなが満足げに頷く。

「言つておくけど桐生、ずっとここにいたつてタイムアウトで弾かれるだけよ。大丈夫、あたしと青龍がいれば安全だから」と、カウンターでミネラルウォーターを飲んでいる青年を指さす。

「人を指さすなって」

ぼやく青龍だが怒つてはいなかつた。

がちやがちやとその他のメンバーが各自の準備を再開させ、桐生は曖昧に頷いた。

「分かった」

「うーの装備、あげるですか？」

と、ウイザードのうーがシオへ初心者用装備を手渡した。

先ほどまでは普通の服を着ていたはずなのに、いつの間にかシオはプリーストの初期装備を身につけていた。

「あ、ありがとうございます」

受け取った装備は使い古されている様子だったが、まだ耐久度は残つてゐる。

「いえいえー。うーたち魔術士系は、基本的に後方支援しか出来ないから、モンスターの不意打ちさえ食らわなければ死なないですよう」

「なんですか……」

シオはこれから起ひる出来事に、不安を覚えずにはいられなかつた。

一方の桐生は、にいなにアサシンの青龍を紹介されていた。

「こいつが青龍、あたしと並ぶ伝説のプレイヤーよ」

軽くにいなを睨む青龍。すぐに桐生へ目を向けて呟いた。

「あー、悪いな。初心者用装備、全部倉庫に入れっぱなしだわ」「はあ！？ 使えない奴ね、あんたは」

青龍を怒鳴るにいなど、適当に謝る青龍。

すっかり置いてけぼりにされ、桐生は呆然と一人を眺めていた。「あ、でも……ちょっとステータス見せて」と、青龍。

「え？」

首を傾げる桐生を見かねて、にいなが彼の胸を叩いた。ぶわっと浮かんだステータス画面。

青龍はそれを確認すると、言った。

「レベル上がってるな」

「…………え？」

と、再び首を傾げる。まつたくついて行けない桐生だが、構わず青龍は装備品を取り出した。

「お前に貸してやるよ、シーフ専用の特別装備セット」

「あ、それってまさか、ベータ版時代の最強装備！？」

にいなの目が輝いた。

「そうそう、これ店売り不可だし、見た目気に入つてたから常备してんだ」

と、得意げに言う青龍。

「武器も欲しいなら、ダガーやるよ」

「あ、ありがと」

桐生がそれらを受け取ると、にいなが再び彼の胸を叩いた。ずっと表示されていたステータス画面がぱつと消えて軽くなる。

「さあ、わざと装備しちゃいなさい。それ、無理に返さなくとも良いから」

と、にいなが笑う。

「駄目だつつの、ちゃんと返せよ」

「え、あ、うん……」

桐生はどきどきしていたが、同時にわくわくし始めていた。これ

から起じる出来事は、きっと素晴らしい非日常だ。

桐生とシオの準備が整つと、にいながあの奥に位置する扉の前へ立つた。

「さあ、行くわよ」

一同がそれぞれに領いて、にいなの手が扉を開く。

宮殿の回廊のような場所だった。

くすんだ青でまとめられた壁に床、所々に見られる装飾も青い。「ちなみにこのクースト、何という名前か知つてますか？」

ふいにうーがシオへ話しかけた。

「え、何て名前なんですか？」

「Redie、別名繰り返される死」

にこにこしながら紡がれる言葉に、シオは思わずドキッとした。

「朽ちた宮殿の広間で自殺を図る女の子を、うーたちプレイヤーが助けに行く話なんですよ」

「……な、なるほど」

世界観が暗く鬱々としているのは知つていたが、さすがに小学生の口から聞かされると怖い。

しかし、うーは構わずににっこり笑つてはいるだけだつた。

しばらく歩いて行くと、戦闘にいたにいなが立ち止まつた。

「モンスター出現！」

ばばつとそれぞれの位置へ付く一同。桐生とシオは一番後ろで魔術師達に守られていた。

ナイトのソレイユがゾンビと化した兵士を斬りつけ、よどんだ返り血を浴びる。

「うわっ、思ったよりもきついな

「がんばるです、ほらっ！」

と、うーがソレイユへ攻撃力アップの魔法をかけた。

それからファイターたちが連携技を繰り出して相手の戦力をそい

でいく。

桐生もシオも、田の前で繰り広げられる光景に、呆然とするしかなかつた。

兵士の首が飛び、血が溢れ、動かなくなる。

「……Re-die」

それは悲しい少女の物語。

* * *

富殿に住む少女の名はリダ。

侍女として王家に仕える母と国王の間に生まれた、いわゆる妾の子だつた。

ある時、富殿に隣国からの遣いが訪れた。
遣いは国王へ言つ。

「条件を受け入れてもらえないのであれば、戦争は免れないでしょ
う」

国王は唸つた。

「少し、考えさせてくれ」

求められたのは王女の身柄であつた。王女を渡せば国に攻め入らないが、そうでないのなら戦争を起こす。

一晩考えて、国王はリダとリダの母が暮らす部屋を訪れた。

「リダには王女の代わりとなつて、隣国へ行つてもうつ」

「何故です、陛下！」リダは、リダは私の大切な

「つ

圧倒的な権力によつて国王に奪われたリダ。

隣国の遣いは、綺麗な衣装を身に纏つたりダを王女と信じ込んだ。
しかしリダは国を離れたくなかった。

事が起きたのは出発前夜、リダの元に黒き魔女が現われたのだ。

「王を憎いと思うかい？自分と母親を引き離した国王を、許せないのかい？」

リダは返した。

「いいえ、許せない」とはあつません。だって、やつかるひとで王女様が平和に暮らせるのない」

魔女は言った。

「王女はあなたのことなんか知ったこりちやなによ。誰もあなたのことなんか気にかけちゃいない」

「嘘」

「本当や。リダ、あなたは捨てられたんだよ。王はあなたを鬱陶しいと思っていた。そのあなたを隣国へ渡すことじ、全て由紙にしてしまおうつて言つ魂胆さ」

リダは泣いた。自分は必要とされているのではなく、捨てられようとしている事実に、心の底から涙した。

そして魔女は、リダへ言つ。

「可哀相なあんたに魔法を授けよつ。それを使って、好きなよつて世界を作りかえると良い」

「ありがとう、魔女のねばあさん」

4 クエスト達成

翌朝、リダは迎えに来た国王を魔法の力で殺害した。騒々しくなる宮殿の中、リダは次々に人を殺していった。

やつて、うたはもうやく田が覚める。

悲鳴を上げて、リダは魔女の声を聞く

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずアーティストとしての経験が必要だ」と、アーティストとしての経験を重視する立場。

それは隣国から送られてきた魔女だった。最初から、隣国は「うするつもりでいたのだ。

リタは頷いた。

* * *

あまりの恐怖に、足がガクガクと震えていた。

卷之三

儀れそ二間なる御女を相生^{シカ}が又来る

彼女の顔はすっかり青ざめていた。

こんなにひどいクエストを、いいなやうーや、青龍たちは淡々と

こなしていぐ

「大丈夫、オレもだから」

桐生さん

つた。そしてみんなは置いて行かれないよ二一人は糸一柄後を追

「やあ、リリからが本番よ！」

「いなが楽しそうに叫ぶ。

「さつさと終わらせるから待つてな」と、青龍。

「雑魚は任せます」

うーもどこか楽しそうに言つて、桐生とシオは息をついた。立ちはだかる大きな扉を開けると、祭壇が見えた。

その上に一人の少女が立つてゐる。ロープを首にかけた、その状態で。

「青龍！」

「分かつてる！」

にいなが光属性の最高魔法を唱えた。視界いっぱいに光が広がり、その間に青龍が少女の元へ向かう。

しかし、あと少しの所で青龍はモンスターに足を取られた。

「くそつ、何だこいつら

床に転がり抵抗する青龍。

そこへうーが風の魔法を唱えた。

「うーに任せます！」

切り裂く音で青龍に襲いかかっていたモンスターがハツ裂きにされる。

「サンキュー、うー！」

「いえいえーーー

再び走り出した青龍だが、今度は魔女が現われ、行く手を阻まれた。

「そいつはあたしに任せつけーーー

と、にいなは雷属性の魔法を唱え、魔女の動きを鈍くさせる。

魔女の隙をついて前進し、祭壇へ上の青龍。

その他の雑魚モンスターはソレイユたち前衛が必死に倒している。

桐生とシオは、ただその様子を見ていた。

青龍がアサシン特有の素早さで少女のロープを解こうとする。

魔法が飛び交い、剣が光を反射して、返り血に濡れる。

「これでどうだっ！」

青龍がロープを解くことに成功すると、魔女が呻いた。

「ぎゃあああ！　あと、あと少しだった、のに……っ」

プログラムされた定型句だ。

モンスターたちも動きを止めて、少女が青龍の腕の中で呟いた。

「ありがとう」

少女リダが目を閉じて、それからぱつぱつと画面が真っ黒になる。

* * *

桐生：何だつたんだ、今の

シオ：分かりません、何か夢を見ていたような・・

にいな・夢じゃないつてばwww

桐生：…まさか、本当に？

うー・うーですよお、本当に」とですう

シオ：うーさん！

にいな・あればこのゲームの醍醐味、体感型クエストってやつ

桐生：そんな・・・すごい

青龍：桐生、お前早く装備返せ

桐生：え？ 青龍うどいにいなんですか？

青龍・ダウンタウンの酒場だ

桐生・すぐ行きます！

にいな・ｗｗｗｗｗｗ

うー・青龍さんひどいｗｗｗｗｗｗ

にいな・で、シオ？　あんたはどうだった？

シオ・えっと・・面白かったです

* * *

装備品を青龍へ返し、桐生は文字を打ち込んだ。

『クソゲーにしか思えなかつたけど、もうちょっとやってみよっかな』

青龍が笑った。

『いーんじゃね？　他にもクエストはたくさん用意されてるしな』

桐生はモーションで頭を下げた。

『これからもよろしくお願ひします』

と、青龍へ友達登録を申請する。

青龍はすぐに許可してくれた。

にこりと微笑つて、桐生は呟いた。

『こんなクソゲー、初めてだ』

生々しいが面白い。気持ち悪くなるが、それもゲームだと思えば悪くはない。

『何かあつたら力になるぜ』

『ありがとうござりますへへ』

* * *

ゲームからログアウトして、シオは息をついた。

「はあ……」

非現実的だつた。

けれども、何故か満たされていることを認めずにはいられない。
次に、いつあの世界へ行けるかは分からぬ。

シオはあまりゲームにはまりたくないが、たまにやるなら面白いと考えていた。

そして、たまにあの世界へ行けるなら、それも良い、と。
あまりにも田まぐるしく、目を閉じるとあの出来事が一から思い出された。

「……もう一度会えるなら、良いかな」

桐生やにいな、うー、青龍……彼らにまた、出逢うことなどが出来る
ない。

シオは納得すると、パソコンをシャットアウトさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138s/>

Re-die～生と死を担う青～

2011年5月19日01時25分発行